

# 〈砂糖とミルク〉の権威

——『嵐が丘』におけるネリーの人工哺育と語り——

中 田 元 子

## 1. 母親代理ネリー

『嵐が丘』(1847)のなかで、母親たちは子どもたちを残して次々に死んでいく。アーンショウ夫人は十五歳のヒンドリーと七歳のキャサリン、そして拾い子の八、九歳になるヒースクリフを残して。ヒンドリーの妻フランシスは生後数カ月のヘアトンを残して。リントン夫人が死んだのは、エドガーが十八歳、イザベラが十四歳のときであった。キャサリンは、自分と同じ名前をつけられることになる生まれたばかりの赤ん坊を残して、イザベラは十二歳のリントンを残して死ぬ。<sup>1</sup>

残された子どもたちの養育を引き継いだのは、多くの場合、使用人としてアーンショウ、リントン両家に仕えたネリー・ディーンであった。あるときは看護人として、またあるときは養育者として子どもたちの母親代理をつとめる。とくに、ヘアトンと二代目キャサリンは誕生後まもなく母を失い、その生存自体危機に瀕することになったはずであるが、二人とも何ごともなかったかのように順調に成長している。この人工哺育の困難な時代にあって、二人がきわめて危うい時期を無事乗り切って成長していくことは注目に値することである。そして、それを成功させたのがネリーなのである。

ネリーが後にアーンショウ家とリントン家の物語を語ることになることを考えると、彼女は自分の物語のために登場人物を看護し、また育てたともいえる。本論ではネリーが果たした看護人／乳母としての履歴をたどり、それが彼女の語り手としての役割とどのように結びついているかを明らかにする。

## 2. <sup>ナース</sup>看護人ネリー

ネリーは、ヒンドリーと乳兄弟であったということもあって、子ども時代をアーンショウ家の子どもたちと一緒に遊びながら過ごした。しかし、アーンショ

ウ夫人の死後、子どもたちの看護人となることによって、母親代理としての役割を担い始める。それまでの遊び仲間が突然自分の子どもに当たるものになったのである。まだ十歳にならない初代キャサリンとヒースクリフが麻疹にかかったとき、十六歳だったネリーはその看護を任される。とくにヒースクリフは重症だったが、手厚い看護をして無事回復させ、医者にはめられる(30)。麻疹は、ワクチンのない時代にあっては子ども時代に必ず罹る病気であったとはいえ、「麻疹は命定め」ともいわれたように、ときに合併症を併発し、死に至ることもあった。もしネリーの看護が奏効しなければ、ヒースクリフは生き残ることができず、ネリーの物語は語られることはなかったのである。

一方、ネリーが看護人として「失敗」した場合もある。初代キャサリンがエドガーとヒースクリフの間で選択を迫られて狂乱状態に陥ったとき、ネリーはそれを芝居だと判断してエドガーに知らせず、必要な看護を受けさせなかった。この対応の遅れの結果、キャサリンは早産の末に死んでしまう。しかし、この「失敗」のためにネリーが解雇されることはない。残された赤ん坊の世話をする仕事があったからである。

### 3. 困難な人工哺育

ヘアトンと二代目キャサリンが生まれた十八世紀後半のイギリスでは、母親が出産直後に死亡した場合、あるいは何らかの理由で乳を与えられない／与えない場合、次善の策として薦められたのは乳母ラクトネースを雇うことであった。新生児に人乳以外のものを与える人工哺育はできるだけ避けるべきであると考えられていた。たとえば、ロンドン捨て子養育院の運営針針としても採用された育児書を著したウィリアム・カドガンは、“dry-nursing I look upon to be the most unnatural and dangerous Method of all” (28) と述べ、人工哺育の子は三人に一人も生き延びないとみている。そのため、養育院の子どもたちも人工哺育せず、田舎の乳母ラクトネースに出すことを薦めている。十九世紀になっても、人工哺育の信頼性のなさは変わらず、たとえばディケンズの『オリヴァー・ツイスト』(1838)では、救貧院で生まれ、出生直後に母を亡くしたオリヴァーのために、その養育の責務を担う教区当局が、救貧院に乳母となりうる人物がいるかどうかを打診したことが書かれている。最下層の生まれの赤ん坊にさえ、まずは人乳をあてがうべく配慮するという段取りは、この時代人工哺育がいか

また、『タイムズ』紙における人工哺育をする乳母<sup>ナース</sup>の求職広告を見ると、十九世紀半ばになっても、出生直後から赤ん坊を人工哺育 (hand-feeding) すると記載している者は、生後一か月から引き受けると書いている求職者にくらべ、きわめて少ない。<sup>2</sup> このことは、誕生直後から人工哺育することがいかに大変で責任重大であることを示すと同時に、それを成し遂げたネリーの手腕のほどを示すものでもある。しかし、奇妙なことに、自らの語りにおいてネリーはこのことに全くふれていない。

#### 4. 十八世紀末の人工哺育

人工哺育 artificial feeding は、dry-nursing, hand-feeding, bottle-feeding, spoon-feeding ともいわれる。artificial という語は、人乳が natural なものであることに対する語であるので、産みの母の乳ではなくても、たとえば乳母の乳でも人乳ならば natural であるということになる。<sup>3</sup>

dry-nursing は wet-nursing に対する語で、乳汁を分泌しない乳母が人工哺育を行うことを意味する。hand-feeding は、dry-nurse が手で栄養を与えるということであるが、この表現は、ディケンズの『大いなる遺産』で、主人公ピップの子ども時代を象徴的に表すものとして効果的に使われている。幼いピップは、自分が年の離れた姉によって「手で育てられた brought up by hand」と聞かされるたびに、自分の置かれたその時の状況から推測して、それは姉の手で叩かれながら育てられたことを意味するものと誤解しているのである。

My sister, Mrs Joe Gargery ...had established a great reputation with herself and the neighbours because she had brought me up "by hand." Having at that time to find out for myself what the expression meant, and knowing her to have a hard and heavy hand, and to be much in the habit of laying it upon her husband as well as upon me, I supposed that Joe Gargery and I were both brought up by hand. (39)

さて現代では、人工哺育といえば当然のこととしてゴム乳首付きガラス製哺育びんによる授乳 bottle-feeding と理解される。しかし、ガラス製の授乳容器が登場しはじめたのは十九世紀半ばのことで、さらにゴム製乳首が一般に受け入れられるようになったのは二十世紀にはいつてからのことである。十八世紀

末のイギリスでは、数種類の授乳容器が併存していた。人工哺育を表す言葉として spoon-feeding という言葉があったことが示すように、皿に入れた栄養物をスプーンで与えるのは一般的なことだった。単純な形状をした皿とスプーンの衛生は比較的保ちやすいものの、一度にたくさんの栄養物を与え過ぎることになることが批判された (Fildes 346)。<sup>4</sup> このほかの容器としては、古くからあった羊皮の乳首をつけた牛の角、ピューター、銀ないし陶器製のパップ・ポット、ヒュー・スミスが1770年に考案したピューター製のバビー・ポットなどがある。これは『ドンビー父子』(1848)でチック氏が、なかなか適当な乳<sup>ウニット</sup>母が見つからないため衰弱していく生まれたばかりの甥に、当面人工哺育したらどうかと提案するとき、“Couldn't something temporary be done with a teapot?” (63)と言うように、ティーポット型、あるいは考案者スミスの形容によればコーヒーポットのような形をしたものだった (Smith 140)。その後さまざまな形、素材の授乳容器が考案されたが、乳児が吸綴しやすく、同時に容器の清潔を保ちやすい形のものを作り出すための試行錯誤は十九世紀末まで続けられた。

一方、栄養物としては、一般的にはパップやパナダと呼ばれる小麦粉やパンなどを水や牛乳で溶いたり、スープで煮たりしたものが使われていた。しかし、これらは赤ん坊が消化しにくいでんぷん質主体のものだったため、消化不良を起こして下痢をし、十分な栄養が摂れずに死に至る、ということがしばしば起こった。十八世紀後半に多くの医者たちが薦めたのは、牛、ヤギ、ロバなどの動物の乳であった。動物の乳についての研究が進み、それらが栄養的に優れていること、また水で薄めると人乳の組成に近くなることがわかってきた。なかでも、組成が人乳にもっとも近いとして、とくにロバの乳を薦める医者もいた。たとえばアームストロングは1771年に出版された育児書で、ロバの乳がたやすく入手できる場合、そして親が代金を支払える場合はそれが最良である、と述べている (qtd. in Fildes 302)。<sup>5</sup> しかし、新鮮な動物の乳は簡単には手に入りにくかったので、それまでの習慣に従ってパップやパナダが与えられる場合も多かった。また、たとえ牛乳など動物の乳を用意できる場合でも、搾乳から時間が経ったために細菌が繁殖したり、あるいは薄めるときの水が不潔だったりなどの理由により、乳児に致命的な影響を与える場合もあった。

## 5. 富裕階級と人工哺育

このように、人工哺育は危険なものみなされており、実行するにしても困難を伴うものであったにもかかわらず、アーンショウ家、リントン家の二人の赤ん坊に乳母は雇われない。<sup>ウエストナーズ</sup>ヘアトンと二代目キャサリンはネリーの人工哺育によって育てられるのである。救貧院で生まれたオリヴァーにさえ、形式的にとはいえ、まず乳母が求められたほどなのに、『嵐が丘』ではなぜ乳母が雇われなかったのだろうか。

確かに乳母は雇うのに金がかかった。<sup>6</sup>しかし、ヨーマン・ジェントリ階層に属するアーンショウ家、リントン家とも、乳母を雇うことを躊躇するほど金銭的に逼迫していたとは考えられない。しかも、男児誕生を報告する女中は、同時にネリーが養育係として選ばれたことを告げる。はじめから乳母を雇うという選択肢はないのである。

実は、何よりも、両家が裕福だったからこそ、乳母に固執することなく新生児の人工哺育を選択することが可能だったのである。先にも述べたように、人工哺育を成功させる重要な要素は、新鮮な動物の乳の確保と授乳器具の清潔を保つことである。そして、新鮮な家畜の乳を手に入れる一番確実な方法は、何といっても自分の家で動物を飼うことである。しかし、これには金と手間がかかる。まず、乳を出す動物を買い入れねばならない。そしてその動物の世話をする使用人も必要である。アーンショウ家とリントン家は農場を経営しており、乳牛も飼っている。ロックウッドは嵐が丘で下男のジョウゼフが乳搾りをしている場面を目撃しているし(14)、リントン家のスラッシュクロス農場には、最寄りの村のギマトンから定期的に牛乳を買いに来ている。イザベラがヒースクリフと駆け落ちしたことをスラッシュクロス農場の女中に最初に知らせたのがこの牛乳運びの若者であったし(103)、後に二代目キャサリンが嵐が丘にいるリントン・ヒースクリフと秘密に手紙のやり取りをしたときも、牛乳運びの少年が使者になった(172)。乳牛を飼育しており、毎日新鮮な乳が搾れるということは、人工哺育をするうえでもっとも重要な条件に恵まれていたということになる。

また、授乳器具の清潔さの確保という点についていえば、これも人手を要するものであった。殺菌のために煮沸消毒しようとする、まず、きれいな水を汲んできて、次に火を起こして湯を沸かし、容器を煮沸消毒して乾燥させる、という手順をとることになる。この作業を授乳のたびに繰り返すのは手間のか

かることである。当然十分な数の使用人がいなければならない。

このように、人工哺育を成功させようとする、金と人手がかかった。ヘアトンと二代目キャサリンは、幸運にも二つの条件を備えた家に生まれたからこそ、危険な人工哺育による乳児期を生き延びることができたのである。<sup>7</sup>

## 6. <sup>ナース</sup>乳母から語り手へ

さて、ヒンドリー・アーンショウの妻フランシスは男の子を出産したものの、結核で余命幾ばくもないと診断され、赤ん坊ヘアトンは誕生と同時にネリーが砂糖とミルクで育てると決められる。

“You must come home directly. You're to nurse it, Nelly — to feed it with sugar and milk, and take care of it, day and night. I wish I were you, because it will be all yours when there is no missis!” (49)

まだ二十歳そこそこの、人工哺育についても未経験のネリーがなぜ養育係として選ばれたかは不明である。ネリーの母親がヘアトンの父親ヒンドリーの乳母であったことが影響しているかもしれない。乳母雇用は、乳母が自分の子を家に残して勤め先に住み込みで働く場合、乳母の子が生得の乳を奪われて死に瀕することを意味するが、嵐が丘では乳母の子であるネリーも養い子ヒンドリーと一緒に育てられた。あるいは、ネリーの母はとくに乳母として雇われたわけではなく、たまたま女主人と同時期に出産したため、乳母の役割を任されたと考えた方が良くもしいない。

人工哺育についてはまったく未経験のネリーではあったが、アーンショウ家では、さきにみたように人工哺育をするための条件はそろっていた。飼育していた乳牛から新鮮な牛乳を搾り、砂糖を加えてヒンドリーに与えた。<sup>8</sup> それでも、初めての人工哺育でさぞや苦勞したものと思われるが、ネリーはそのことについてはまったくふれず、ただ、ヘアトンがネリーになつたことが、ネリーの苦勞の成果として述べられるだけである (50)。

一方、ネリーが育てた二人目の赤ん坊である二代目キャサリンが生き延びるのは、ヘアトンの場合よりさらに困難なことだっただろう。“such a grand bairn” (49)であったヘアトンとは対照的に、二代目キャサリンは “a puny, seven months' child” (127)として生まれたからである。<sup>9</sup> しかも、みながその

誕生を歓喜して迎えたヘアトンの場合とは違って、今度は、周囲の関心は、生まれた赤ん坊ではなく、瀕死の母親の方に集まっていた。そのためこの“unwelcomed infant” (127)は誕生後しばらく放っておかれたが、二時間後に母親が亡くなった後も生きていたので、再びネリーが育てることになる。ヘアトンを育てた経験のあるネリーは、養育係としてまさにうってつけの人物だった。しかし、六月生まれのヘアトンとは違って、二代目キャサリンが生まれたのは三月。まだ寒い最中であって、乳牛の乳の出が悪い時期だったことが考えられる。とくに未熟児を育てるためには多くの苦勞があったと推測されるが、ヘアトンの場合と同様、ネリーはそれらのことについてはまったく語らず、キャサリンが順調に育っていくことのみが語られる。

ネリーがヘアトンとキャサリンの人工哺育にまつわる苦勞について寡黙であること、またその成功について当然の贅辞を要求しないことは、『大いなる遺産』のミセス・ジョーが、事あるごとにピップを人工哺育で育て上げたことを手柄として吹聴し、権威の根拠としていることと対照的である。しかし、ネリーは、ミセス・ジョーのように人工哺育成功者としての権威は求めないものの、さらに重要な権威を要求し、獲得している。すなわち語り手としての権威である。“a poor man's daughter” (49)にすぎないネリーが、“respectable houses” (46)であるアーンショウ、リントン両家の代表として語るという、権威簞奪を果たしているのは、彼女が子どもたちの養育者であったこと、すなわち危険な人工哺育を任され、生殺与奪の権を握っていたことに由来するのである。ネリーは語り手として両家にまつわる物語を語る前に、まず、自分の物語の登場人物たちを自分で養育した。あたかも、自分が語ることになる物語を思い描き、それにふさわしい配役を考えていたかのように。

\*本研究は、平成14年度筑波大学学内プロジェクト研究（奨励研究）「19世紀イギリスにおける母親の身体をめぐるディスコース」（研究代表者 中田元子）の助成を受けている。

## 注

- 1 子どもたちの年齢については、Sanger が作成した家系図を参考にして推測した。
- 2 たとえば1861年の *Times* の求職広告欄を見ると、“NURSE. Can take a baby from the month and bring it up by hand.” (January 3, 12) というように生後一か月から人工哺育することを引き受けるという求職広告は45件あるが、“NURSE (HEAD). Can take a baby from the birth and bring it up by hand.” (January 5, 15) というように誕生直後から人工哺育を引き受けるという広告は7件しかない。調査したのは、各月の最初の週の火、木、土曜日の求職広告欄である。なお、人工哺育をするとき明記していないものも含めると、生後一か月から引き受けるという広告は157件、誕生直後から引き受けるというものは17件ある。「生後一か月」が区切りの時期になっているのは、出産直後から一か月間は産婦と赤ん坊の両方の面倒を見る産後ナース *monthly-nurse* が雇われ、ちょうどその雇用期限が切れる時期だからである。また、この時期の広告では、ほとんどが単に Nurse として掲載されており、Dry Nurse という職種を掲げて広告を出している例は少ない。Wet Nurse は別にそれとして明白に記載されていたので、あえて Dry と断る必要はなかったのだろう。なお、現代では Nurse といえば Sick Nurse のことを意味するが、この時期の広告では Nurse は子どもの世話をする Dry Nurse を意味していることの方が圧倒的に多い。
- 3 母親以外の乳を *natural* という例は、たとえば、“If it be ascertained...that a mother cannot suckle her child, ...a healthy wet-nurse should be procured, as, of course, the food which nature has supplied is far, very far superior to any invented by art” (Chavasse 28).
- 4 Combe は、乳児が飲みやすいようにゆっくり授乳するためには、“a glass sucking-bottle, provided with a tube of prepared india-rubber, which passes through the stopper into the bottle, and is fitted at its free extremity with an artificial nipple pierced with one or several small holes, is generally used, and answers much better than feeding by the spoon” と述べている (123)。この記述から、ガラス製の哺乳びんが開発されていた十九世紀半ば過ぎでも、依然としてスプーンで与える習慣があったことがわかる。なお、授乳器具と母乳代替品の歴史については、Fildes 262-350 および Baumslag 113-143 を参考にした。
- 5 十九世紀の医者たちのなかにもロバの乳を最良とする者が多い。たとえば、Combe は “ass's milk deserves the preference over every other kind of food” と述べている (122)。Bull は人乳とロバ、牛、羊、ヤギの乳の栄養組成表をあげて、カゼイン、脂肪、糖分、塩分、水分の含有量を比較し、ロバの乳を新生児にとって最良としている (66)。また Chavasse も “asses' milk will be found the best substitute” (29) と述べて薦めている。
- 6 Fildes によれば、ウェットナースにはドライナースの倍の給料が支払われたとのことである (162)。



- <sup>7</sup> 時代は下るが、1842年、グラッドストーンが第二子のアグネスに乳母を雇用するか人工哺育するかを選択を迫られたとき、より安全とされる乳母雇用をした場合に陥ることになる倫理的ジレンマ（自分の子どものために乳母の子どもの命が犠牲になる）を人工哺育を選択することによって回避できたのは、妻の実家の広大な所領で、乳児にとって最適の乳を出すこととされるロバを飼い、毎日新鮮な乳を搾ることができる見通しがあったからである（247 - 48）。
- <sup>8</sup> 牛乳を乳児にとって消化しやすいものにするために、もっとも一般的に用いられた方法は、水で薄めて砂糖か大麦の重湯を加えることであった（Baumslag 120）。十九世紀の医師たちは、ロバの乳の場合には砂糖を加える必要はないが、牛乳を与える場合は砂糖を加える、と書いている。Bull 67; Chavasse 29; Combe 29などを参照のこと。また、十八世紀末には砂糖入り紅茶が労働者階級のあいだでも普及しており、砂糖は生活必需品だったが、それほど安価なものというわけでもなかった。
- <sup>9</sup> F. F. Marx (1968) によれば、未熟児は [Marx の著書の] 100年ほど前からやっと可能になった特別の手当を受けなければ、ほとんど生き延びることはできなかったとのことである (qtd. in Fildes 267)。

#### 参考文献

- Baumslag, Naomi, and Dia L. Michels. *Milk, Money, and Madness: The Culture and Politics of Breastfeeding*. Westport, CT: Bergin and Garvey, 1995.
- Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. 1847. Ed. William M. Sale, Jr. and Richard J. Dunn. 3rd ed. New York: Norton, 1990.
- Bull, Thomas. *The Maternal Management of Children*. 13th ed. London: Longmans, 1875.
- Cadogan, William. *An Essay upon Nursing, and the Management of Children from their Birth to Three Years of Age*. 1748. 4th ed. 1750. Rpt. as *Three Treatises on Child Rearing*. Ed. Randolph Trumbach. New York: Garland, 1985.
- Chavasse, P. H. *Advice to a Mother on the Management of her Children and on the Treatment of the Moment of Some of Their More Pressing Illnesses and Accidents*. 12th ed. London: J. and A. Churchill, 1875.
- Combe, Andrew. *The Management of Infancy, Physiological and Moral Intended Chiefly for the Use of Parents*. 10th ed. Revised and Edited by Sir James Clark. Edinburgh: Maclachlan and Stewart, 1870.
- Dickens, Charles. *Dombey and Son*. 1848. Ed. Peter Fairclough. Penguin Classics. Harmondsworth: Penguin, 1985.
- . *Great Expectations*. 1861. Ed. Angus Calder. Penguin Classics. Harmondsworth: Penguin, 1985.

- . *Oliver Twist*. 1838. Introd. Humphry House. *The Oxford Illustrated Dickens*. London : Oxford UP, 1974.
- Fildes, Valerie A. *Breasts, Bottles and Babies : A History of Infant Feeding*. Edinburgh : Edinburgh UP, 1986.
- Gladstone, William Ewart. *Gladstone Diaries*. Vol. 3 (1840-1847). Ed. M. R. D. Foot and H. C. G. Matthew. Oxford : Clarendon, 1974.
- Sanger, C. P. "The Structure of *Wuthering Heights*." *Wuthering Heights*. Ed. William M. Sale, Jr. and Richard J. Dunn. 3rd ed. New York : Norton, 1990.
- Smith, Hugh. *Letters to Married Women*. 2nd ed. London : G. Kearsly, 1768.
- The Times*. Advertisements in 1861.